



TITLE:

京大広報 No. 252

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 252. 京大広報 1983, 252: 361-370

ISSUE DATE:

1983-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209434>

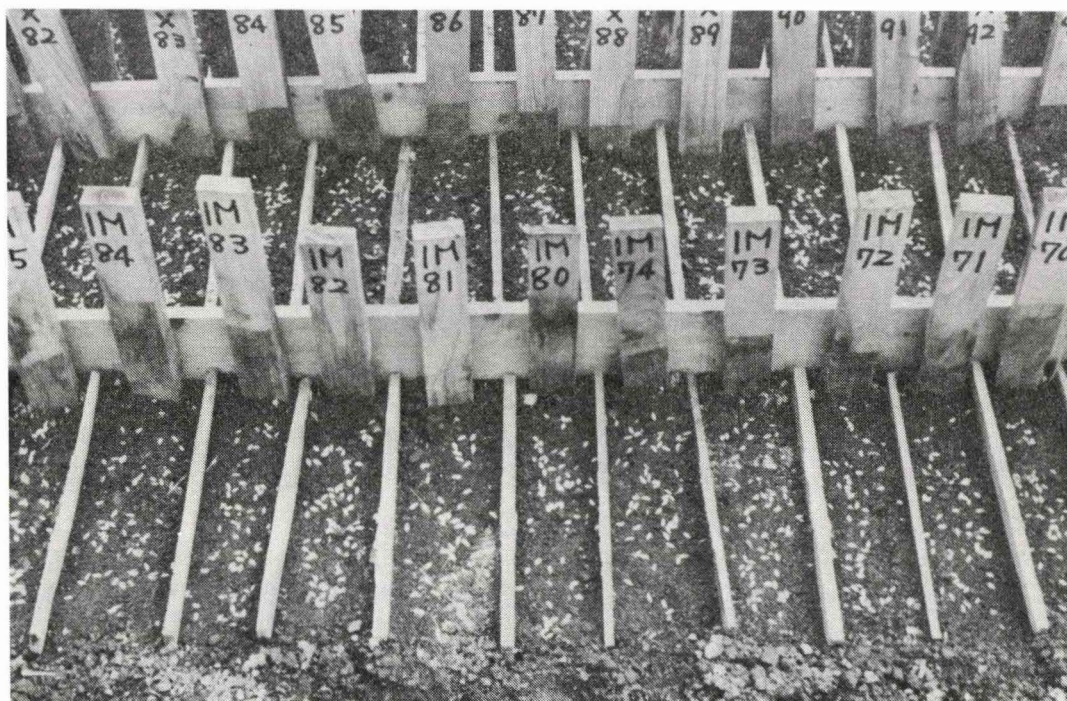
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 252

京都大学広報委員会



イネの播種 — 関連記事本文368ページ —

目次

学部入学式における総長のことば		昭和58年度医療技術短期大学部入学式	368
総長 沢田 敏男	362	＜紹介＞	
昭和58年度学部入学式	365	農学部	
昭和58年度大学院入学式	365	農学科育種学講座	368
北京大学との学術交流	365	計報	369
部局長の交替	365	日誌	369
昭和57年度京都大学創立七十周年		＜随想＞	
記念後援会助成金交付者	366	縁	
4月7日の現場検証	367	名誉教授 上田 泰治	370

学部入学式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男

本日ここに、昭和58年度入学式を挙行し、2,537名のはつらつとした優れた諸君を本学に迎え得たことは、京都大学のみでなく、国家社会にとっても大きな喜びであります。諸君の入学を祝い、その前途を祝福するためにご臨席いただきました本学名誉教授の先生方、各部局長並びに教職員の皆様に対して、入学生の方々と共に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

入学生の方々、おめでとうございます。諸君はこれまで学業を積み、幾多の困難を乗り越えて、めでたくこの京都大学に入学されたのであって、今や大きな喜びと共に、新しい希望に燃えていることと思います。そのような諸君をみて、ご両親の皆様は、またどれほどの喜びをかみしめておられることかと推察し、心からお喜び申し上げる次第であります。

さて、諸君が志して入学された京都大学とは、いかなる大学でありましょうか。入学の初頭にあって、京都大学の歴史や伝統・学風について知ることは、そこに学ぶ者の心構えや自覚を醸成する上で大変重要であり、また意義深いことと思います。

京都大学は、明治30年（1897年）6月18日に開学されたのでありますが、その創立にあたって、当時唯一の国立大学として設置されていた東京大学が、我が国の近代化のための指導者養成機関として位置付けられたのに対し、時の明治政府や国会は、清新なる学術の発展を促し、真に学問する大学を創設するべく建議し開学したのであります。清新なる学術とは、すなわち独創的な研究、創造性に富む学問の研究のことであり、また真に学問をする大学とは、世に^{おもね}阿らず、真理の探究を目指すところの、純粋な学問の府ということであります。そして、近代国家の黎明期にあった我が国において、この東西の両大学が競学の風を起し、お互いに切磋琢磨し、学術の発展を促そうとしたのであります。この趣旨が本学建学の精神にもつながって、その後の教官や関係者にアカデミックな学問・研究に対する強い使命感を意識させ、世に「京都学派」と称される独自の学風を培ってまいりました。また真理の探究を使命とする大学においては、当然学問・研究の自由が必要であり、そのためには大学の自治が尊重されなければなりません。この学問・研究の自由と大学の自治を確立するために、京都大学は大きな努力を続けてきています。すなわち、いわゆる沢柳事件（1913年～1914年）や滝川事件（1933年）などは、思索の自由と教授の自由を含む学問の独立、研究の自由を確保し、大学の自治を確立するためにたたかわれたものであります。このように京都大学は、我が国の大学の健全な管理運営制度の創造と発展に寄与すると共に、進取的、独創的な多くの研究業績によって、人類の幸福に貢献する学問の府として輝かしい歴史と伝統を形成してまいりました。京都大学は今年創立86周年を迎えますが、この間 111,156名にのぼる卒業生、19,064名の修士及び17,578名の博士を世に送り、国内外の学術と文化の向上発展に大きく寄与しています。そして卒業生の中から、どれほど優れた学者が輩出し、また偉大な学問的業績が生み出されたかは、あらためてここに挙げる必要もないと思います。諸君も真理を学び、人生の価値を模索するにふさわしい場として、京都大学を選ばれた訳でありましょう。諸君は、このような京都大学の歴史や伝統・学風をしっかり見つめ、これを踏まえて勉学をされるよう望むものであります。

さて、大学において学びつつ人間性を培うということについて一言述べてみたいと思います。

諸君は、まず大学に学ぶことの意義を深くかみしめて欲しいと思います。言うまでもなく、京都大学に入学したといっても、それは人生における社会的特権を与えられたということではなく、その真の意味は、大学に在学する数年間を通じて自らを知的に錬磨し、人間性を磨きあげるという課題を負うことにあります。またそのような課題と取り組むために、知的に模索する恵まれた環境を与えられたということでもあります。

今、諸君が自らに問いかけねばならないことは、学問は何のために存在するのかということにあります。学問は自分一人の社会的栄達のために為されるわけでもなく、また科学法則を観念的にもてあそぶためにあるわけでもありません。大学は、確かに真理探究の場ではありますが、この真理探究が人間性の顧慮、人間性の尊厳への感受性にうらづけられていないとしたら、それは生命と正当性を失ったむなしい学問であるということになるでしょう。諸君には、何よりも人間性の尊厳を意識することを期待したいと思います。

人間性という概念は、人類の歴史の中で、その時代時代の特徴に応じて様々に解釈されてきました。例えば、人間性を動物との対比において考えるときは、人間の「理性」こそが人間性の本質であると考えられていましたし、また人間性をある宗教の支配との対応において考えるときは、人間の持つ「自由」こそ人間性の本質と考えられたこともありました。現代は人間性の回復が主張される時代であるといえます。それは、急激に発達し時には独走的でもあったテクノロジーに対する人間疎外の問題としてとらえられているからと申せましょう。このことについて、諸君のこれまでの経験に即して考察してみたいと思います。諸君が今日ここに、京都大学に合格したということは、それにふさわしい学力や知識を有していたことを示すものであります。さきに述べたように、人間を動物との対比においてとらえるなら、諸君の持っている知識はまさに人間固有のものであり、その点から見れば高い人間性を持つものといえるでしょう。しかし、一般にはそのように考えられておりません。それはなぜでしょうか。それは合格にいたる学力や知識のみでは、いわゆる「生きたもの」となっていないからであります。端的に申すならば、受験に必要な知識とは、他人によって「問い」がたてられ、「正解」の存在が前提されている場合に役立つものであります。しかし、諸君がこれから人間としてぶつかる課題は、そもそも「問い」をたてることから、自分で自ら行なわなければならないし、そこに「正解」が存在しているか否かさえ不明なのであります。大学における研究は、どのような「問い」をたてるかによって、問題解決の可能性がほとんど決まるといっても過言ではありません。このような知識のあり方は、受験勉強において得た知識の在り方とは大きく異なるものであり、そこに重大な「知の組み換え」を必要とするものであります。

さて上述のように、現代はテクノロジーに対比するものとして、人間性の回復が叫ばれていると申しました。我々はそのことがテクノロジーの否定を意味しているとは考えません。このようなテクノロジーは、他ならぬ人間の知識によって、我々の生活が便利で豊かになるように創造されてきたもので、いわば人間の本性に基づく産物であると申せましょう。このパラドックスを無視して今日のテクノロジーを否定し、自然にかえれと叫んでも、それは単なる逆もどりであり、同じことの繰り返しを招くだけでありましょう。我々はテクノロジーを単純に否定するのではなく、またテクノロジーを人間の生活や存在から遊離したものとしてではなく、それに深く根ざしたものとして



活用するだけの、いわゆる「生きた知識」を獲得しようと努力しなくてはならないと思います。人間にかかわる本当の価値、真の幸福のためという全体的な視点から現代のテクノロジーを正しく位置づけることによってこそ、人間性の回復が可能となるものであります。

このような全一的な知、すなわち事実の知識と倫理的価値とを全体的、統一的に獲得し、人間性を培う方策として自己の視野を拡大し、異なった視座を持つ可能性を広めることを指摘しておきたいと思います。既成の立場から物事を見ると、そこには常に正解が準備されています。それはたやすく、安心ではありまじょうが、何らの発展性をも持ちません。自己の視野を拡大し、異なる視座を獲得する上で、総合大学としての京都大学は、まことに望ましい条件をそなえているといえまじょう。本学における優秀な教官が、各学部、研究所において行なっている講義、あるいは適宜催される特別講演など、またそれに加えて多彩なクラブ活動の組織を持つ本学は、諸君の積極的な利用を歓迎し、期待しております。このような総合大学に入学した利点を生かして、諸君が狭い領域に閉じこもることなく、他学部の講義や講演も聴いたり、豊かなクラブ活動等に参加・挑戦したりして、自らの人間性を豊かにされんことを切に希望するものであります。

人間性を培うというときの「培う」の意味は、もともと草木の根に耕やされた土をかけて育てるということでもあります。草木を育てることは、あせっても一朝一夕にできることではありません。それは根気よく持続的行なうことによって、ゆっくりとその成果が生じてくる過程であります。諸君も4年、あるいは6年間にわたる大学生活を通じて、草木を育てるようにあせらず、根気よく人間性を培うことに努力して欲しいと思います。

さらに大学生活をより豊かにするために、千年の古都の芸術・文化に親しみ、先人の遺産に接し、残された偉業や歴史を学ぶことも忘れてはなりません。また大学時代においてスポーツを愛好し、体力・気力を涵養し、またスポーツを通じ広く良き友人をつくることも大切であります。京都大学はこのスポーツの面においても輝かしい伝統を培っており、カレッジ・スポーツの真価を高揚してまいりました。最近では体育会を中心とした運動部やクラブ等の活躍には目覚ましいものがあります。大学において勉学とスポーツを両立させるには、それ相当の工夫と努力が必要でありまじょう。しかし、諸君の燃える情熱をもって、この壁を打ち破るよう努めて欲しいと思います。

最後に、入学生の諸君は国立大学の学生としての自覚と社会的責務を考えて欲しいと思います。国立大学に学ぶ学生一人一人の教育に要する経費のうち、多大の額が国費から支出され、まかなわれていることを、諸君は深く認識し、このことをまず国家社会に対し感謝しなければなりません。高等教育に要する経費を国が負担することの意味は、大学教育の果す効果——学術研究の推進や人材の育成——の多くが国家社会に還元されることであります。しかし、また同時に、この効果が諸君自身にも帰属することを考えて、多くの国費負担によって大学教育を享受できることに感謝すると共に、その社会的責務の重大さを自覚し、より一層勉学や人間形成に心がけて欲しいと希望するものであります。

入学生の諸君。いろいろ申し述べましたが、要するにこれからの大学生活において、大学に学ぶことの意義や学問の存在意義を深くかみしめ、真に学ぶことを学ぶと共に、人間性の尊厳を常に意識しつつ、自らの人間性を培うことに努めて下さい。そうすることが、未来に生きる諸君の、また明るい未来社会を創造すべき諸君への課題ではなかろうかと存じます。

諸君の大学生活のスタートにあたり、所感を申し述べて式辞といたします。

(本稿は、4月11日の学部入学式における総長のことばを速記をもとにしてまとめたものである。)

＜大学の動き＞

昭和58年度学部入学式

4月11日（月）午前10時5分から、昭和58年度学部入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は名誉教授、教職員など臨席のもとに、学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午前10時30分に終了した。

今年度の学部新入生は次のとおりである。

文学部200名、教育学部51名、法学部351名、経済学部207名、理学部281名、医学部120名、薬学部80名、工学部950名、農学部297名、計2,537名。そのほか、3年次に35名の編入学生があった。

昭和58年度大学院入学式

4月11日（月）午後3時から、昭和58年度大学院入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は名誉教授、教職員など臨席のもとに、学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午後3時20分に終了した。

今年度の大学院新入生は次のとおりである。

研 究 科	修 士 課 程	博士後期課程*
文 学 研 究 科	62 名	6 名
教育 学 研 究 科	17	0
法 学 研 究 科	25	4
経 済 学 研 究 科	16	6
理 学 研 究 科	136	5
医 学 研 究 科		96
薬 学 研 究 科	34	2
工 学 研 究 科	557	8
農 学 研 究 科	99	10
計	946	137

* 医学研究科は博士課程

北京大学との学術交流

本学と中華人民共和国北京大学との学術交流に関する覚書が昭和58年4月1日に次のとおり締結された。

この覚書交換については、かねてから学内で検討が重ねられてきたが、昨年9月に沢田敏男総長が北京大学を訪問し、この具体化について協議が行われたことを契機としてこのたび締結されたものである。

京都大学と北京大学との学術交流に関する
一般的覚書

京都大学総長と北京大学校長は、両大学の教育及び研究の協力と交流を推進するために、ここに学術交流に関する覚書を作成する。

1. 両大学は、双方の学術交流を拡大、推進するために、特に次の諸活動を行うことを奨励する。
 - (1) 学術資料、刊行物及び情報の交換
 - (2) 教員又は研究者の交流
 - (3) 学生の交流
 - (4) 共同研究及び研究集会の実施
2. 前項の諸活動の具体化については、両大学間で緊密に連絡し、協議して実施に当たる。
3. この覚書を変更又は解消する場合は、両者の協議によるものとする。
4. この覚書は、日本語及び中国語で作成され、両文書は等しく正文である。

昭和58年4月1日

京都大学総長
沢 田 敏 男

北京大学校長
張 竜 翔

部局長の交替

経済研究所長

宮崎義一経済研究所長の任期満了に伴い、その後任として尾上久雄経済研究所教授（環境経済研究部門担当）が4月2日任命された。任期は昭和60年4月1日までである。

数理解析研究所長

島田信夫数理解析研究所長の任期満了に伴い、その後任として廣中平祐数理解析研究所教授（大域解析学研究部門担当）が4月2日任命された。任期は昭和60年4月1日までである。

原子炉実験所長

林 竹男原子炉実験所長の任期満了に伴い、その後任として岡本 朴原子炉実験所教授（原子炉設備研究部門担当）が4月2日任命された。任期は昭和60年4月1日までである。

昭和57年度京都大学創立七十周年 記念後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委員会で決定した昭和57年度助成金交付者は、第1

種（海外派遣研究員）18名、第2種（海外からの招へい学者）5名、第3種（海外派遣学術調査隊）3グループ、第4種6名で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査・研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当・宿泊料）を交付するものである。派遣期間は、1) 1か月、2) 約3か月、3) 約6か月である。

派遣期間	所 属 部 局	職 名	氏 名	主 な 派 遣 国	研 究 題 目
6か月	理 学 部	助 手	大 谷 浩	連 合 王 国	セイファート銀河核爆発の研究
〃	農 学 部	助 手	内 田 有 恒	アメリカ合衆国 フランス共和国	細菌の胞子形成に関する生化学的研究
〃	原子炉実験所	助 手	福 井 正 美	カ ナ ダ	放出放射能の地中隔離に関する研究
3か月	薬 学 部	教 授	富 田 謙 吉	アメリカ合衆国 ド イ ツ 連 邦 共 和 国	ポリ-β-ヒドロキソ酪酸の代謝ならびに応用開発に関する研究調査
〃	教 養 部	教 授	山 本 誠 作	アメリカ合衆国	ホワイトヘッドとプロセス思想の研究
〃	東 南 ア ジ ア 研究センター	助 手	片 山 裕	フィリピン 共 和 国	フィリピン・マニラ市郊外におけるバランガイ制度の実地調査
1か月	教 育 学 部	助教授	田 中 昌 人	オーストラリア 連 邦	原住民アボリジニ乳幼児の key age における発達の特徴と言語発達の改善についての研究
〃	法 学 部	教 授	谷 口 安 平	アメリカ合衆国 ベネズエラ 共 和 国	国際比較法学会出席及び民事裁判実務の調査
〃	理 学 部	教 授	寺 本 英	アメリカ合衆国 イタリア共和国	数理生態学に関する国際シンポジウム出席及び数理生物学とくに生態系の数理モデルの研究
〃	医 学 部	教 授	早 石 修	スウェーデン 王 国 イタリア共和国	脳神経系におけるプロスタグランディンD ₂ の代謝と機能に関する研究
〃	医 学 部	教 授	水 野 昇	中華人民共和国	中枢神経系ニューロン回路の形態学分析に関する研究
〃	工 学 部	助教授	小 澤 孝 夫	ド イ ツ 連 邦 共 和 国 イタリア共和国	回路とシステム国際シンポジウムに出席及び回路とシステムに関する研究調査
〃	農 学 部	教 授	石 橋 武 彦	アメリカ合衆国	哺乳動物の泌乳機構に関する内分泌学的研究調査
〃	体 育 指 導 セ ン タ ー	講 師	井 街 悠	アメリカ合衆国	日系米人の体力に関する研究調査
〃	原子エネルギー 研 究 所	助教授	塩 津 正 博	ド イ ツ 連 邦 共 和 国 オランダ王国	ナトリウム伝熱流動問題研究調査及び第7回国際伝熱会議出席
〃	食糧科学研究所	教 授	木 村 光	オーストラリア 連 邦	第12回国際生化学会議出席並びにバイオテクノロジー研究調査
〃	工 学 部	教 授	岩 井 壮 介	ド イ ツ 連 邦 共 和 国 ス イ ス 連 邦	マン・マシン・システムの解析・設計・評価に関する国際会議に出席及び研究調査
〃	化学研究所	助 手	小 林 隆 史	ド イ ツ 連 邦 共 和 国	高分解能電子顕微鏡法と電子線エネルギー損失スペクトル法の併用による超ミクロ物質の研究

2. 第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義・研究指導等を依頼してその分野の研究発展をはかるために助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するものである。招へい期間は、原則として1～3か月である。

受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
文 学 部	内 田 紀 彦	インド 国際 Dravida 言語学研究 所 上級研究員	インド・アーリア語派歴史言語学
理 学 部	Paul Townsend	フランス共和国 Ecole Normale 理論物理 研究所 上級研究員	素粒子論 超対称性と超重力理論
工 学 部	E. Johansen Crosby	アメリカ合衆国 Wisconsin 大学 Madison 分校 教授	食品噴霧乾燥法に関する基礎的研究
農 学 部	Terry E. Acree	アメリカ合衆国 Cornell 大学 教授	昆虫の寄主選択における揮発性成分の超微量分析に関する研究
数理解析研究所	Raymond F. Streater	連合王国 London 大学 Bedford College 教授	数理解析学 場の理論の数学的基礎

3. 第3種

海外において、調査研究を行う本学の学術調査隊であって、原則として国費などの支給を受けるものを対象として助成金（調査に要する経費と支弁される国費との差額の一部）を交付するものである。

代 表 者	調 査 名
農 学 部 教 授 門 田 元	ネパールヒマラヤにおける微生物の分布・適応・進化に関する調査研究
教 養 部 助 教 授 堀 田 満	マレーシア湿潤地帯における種の生態及び分化
人文科学研究所 助 教 授 谷 泰	ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究

4. 第4種

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所 属・職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
農 学 部 教 授	山 田 康 之	昭和 57. 5. 10 ～ 57. 5. 19	アメリカ合衆国における高等教育・研究機関の調査
総 長	沢 田 敏 男	57. 8. 30 ～ 57. 9. 8	中国における高等教育・研究機関の調査
人文科学研究所 助 手	森 時 彦	同 上	中国の教育・研究機関における学術交流の実情について調査
庶務部国際主幹 付第一渉外掛長	櫻 井 功	同 上	同 上
事 務 局 長	澤 田 徹	58. 4. 16 ～ 58. 4. 28	パリ第七大学と学術交流計画の打合せ及びヨーロッパにおける学術研究機関の視察
庶 務 部 広 報 調 査 課 長	西 村 幸 雄	同 上	ヨーロッパにおける学術研究機関の視察

4月7日の現場検証

4月7日（木）未明、事務局本館の窓ガラス3枚などが投石により破壊された。これに関して、

警察への被害の届出が行なわれ、警察の現場検証が本学関係者立会いの上、同日午前10時50分頃から同11時30分頃まで行なわれた。

昭和58年度医療技術短期大学部 入学式

医療技術短期大学部では、昭和58年度入学式を4月7日(木)午前10時から、京大会館101号室において来賓臨席のもとに挙行了した。

式典は、「学長のことば」、来賓祝辞と進行し、午前10時25分に終了した。

今年度の新入生は、看護学科80名、衛生技術学科40名、理学療法学科21名、作業療法学科20名、専攻科助産学特別専攻20名、計181名である。

(医療技術短期大学部)

＜紹介＞

農 学 部

農学科育種学講座

農学部は創設と同時に設置された農作園芸学科は、両三年の揺籃期を経て大正15年農学科と改称され、作物学、育種学、園芸学第一(現在の蔬菜花卉園芸学)及び園芸学第二(現在の果樹園芸学)の4講座が発足した。その後、畜産学2講座が併設された(昭和12年、32年)が、畜産学科の設置に伴って分離し(昭和47年)、代りに新しく雑草学講座が加わって(昭和48年)現在に至っている。

各講座はその設立の当初より、農業発展の基盤である一次生産の向上とこれを支え推進する人材の養成を目指してそれぞれユニークな研究、教育を展開してきた。もとより農学の基礎は自然の土と植物にあり、その研究には息の長い地味な取り組みが必須であるが、同時に、時宜に適った敏速かつ最先端の対応も要求される。従って各講座とも、絶えずこのような課題に立ち向かいつつ60年に近い努力の歴史を刻んで来たと言えるであろう。当然、その成果は多岐に亘り、現在行なわれている研究もまた多彩である。その全貌を示唆する一助として、以下に育種学講座を紹介したい。

育種学講座における研究は、新種育成の理論を追究し、その技術を確認して育種学並びに育種事業の発展に寄与することを目的としている。講座開設以来この目的の下に実施された研究の対象はイネ、ムギ、カンショノリアサなどの普通作物を中心に、茶、糊麻、落花生などの特用作物、ススキ、ライグラス、レンゲなどの牧草類、さらにスイカ、ダリア、アイリスなどの園芸作物にも及んでおり、研究の視点、方法も多種

多様であるが、この内イネ及びムギ類では一貫して研究が継承されて来た。

現在実施中の研究はいずれもイネ及びムギ類に関するもので、その課題を列記すると次のようである。

1) 突然変異の誘発並びに誘発変異の育種的利用に関する研究——これは既に20年来継続している主要課題であって、目下のところ戻し交雑育種の効率化を目指した雄性不稔稲の作出、及び我が国のコムギ育種で最大の関心が寄せられている極早生遺伝子源の開拓に取り組む傍ら、誘発し得た多数の突然変異体につき、順次その育種的価値の評価及び変異遺伝子の分析・同定を実施している。特にイネについては、最近国際原子力機関(IAEA)によって組織された「半矮性突然変異体とその交雑育種への利用」と題する国際協力研究に参加し、半矮性遺伝子の起原と形質発現を追究中である。

2) 出穂期に関する遺伝機構の解析——イネの出穂期に関する育種の体系化を意図した研究であって、種々の本邦品種並びに誘発突然変異系統について、それぞれの出穂期を支配する感温性、感光性、基本栄養生長性などの諸特性を明らかにするとともに、これら特性に関与する主働遺伝子を、既知の3遺伝子を手懸りとして検出・同定している。

3) 選抜方法に関する研究——自殖性禾穀類の



交雑後代における有効な選抜方策を確立しようとするもので、選抜の対象となすべき世代や形質あるいは望ましい集団規模や選抜強度などに関する理論的考察と、イネ、ムギの模擬分離集団を用いた実証的研究からなる。

4) 遺伝子の形質発現に関する発育遺伝学的研究——有望個体の早期選抜法、栽培条件に見合った品種の選択法などを明らかにしようとするもので、特定の実用形質を支配する遺伝子の他形質に及ぼす作用とその環境反応、諸形質相互間の相関関係等を詳細に追跡している。

5) 異質細胞質の効果に関する研究——遠縁交雑による育種での問題点を解明しようとするもので、数種の *Aegilops* 属の細胞質を持つ普通コムギを素材として供試し、農業形質について核と細胞質の交互作用を解析している。

6) 染色体構成の世代変異に関する研究——6倍体ライコムギ × 普通コムギ後代について、染色体構成の世代前進に伴う変化を明らかにし、上記交雑の有用性を探索しようとするものである。

7) コムギの低温要求性に関する研究——コムギの出穂期は複合形質であり、その育種には単一

構成形質ごとの解析が不可欠であるとの観点より実施しているもので、既に極めて正確な低温要求性の判定基準を設定し得ている。

ところで、上記各研究の主舞台はいずれも北部構内の圃場である。講座数十年の歴史を通じ、実際の農業に立脚した数々の成果も、相次ぐ新しい命題も、ここに胚胎したと言って過言ではない。また、講座創設以来育成または収集され、随時研究素材として活用されている貴重な系統・品種は10作物3,000種をこえるが、上記の圃場はそれらの保存・更新の場でもある。播種、移植、収穫などの圃場作業が講座全員参加の最優先行事となっているのも故なしとしない。

昭和58年4月現在、育種学講座が送り出した学部卒業生は225名、大学院修士課程修了生は66名を数える。一方講座の現員は専任教員が教授1、助教授1、助手2の4名、専攻学生が大学院博士課程2、修士課程4、4回生6の12名、このほか研修員1、文部省内地研究員1、外国人招へい学者(西ドイツ)1で、実験シーズンの開幕を目前にしてそれぞれ準備に余念がない。

(農学部)

計 報

岸本誠二郎(本学名誉教授・経済学博士)

4月5日逝去、80歳。東京帝国大学経済学部卒。昭和21年本学経済学部教授就任、同40年経済研究所教授、同41年退官。その間評議員(昭和24年~26年)、経済学部長(昭和26年~27年)、経済研究所長(昭和37年~41年)を歴任。昭和47年勲二等旭日重光章受章。専門は理論経済学、経済学史。

菅原 菅雄(本学名誉教授・工学博士)

4月10日逝去、86歳。本学工科大学卒。昭和6年本学工学部教授就任、同34年退官。昭和44年勲二等瑞宝章受章。専門は熱力学、蒸気工学。

日 誌

(1983年3月1日~3月31日)

3月4日~5日

入学者選抜学力試験(第2次学力検査)

〳 医療技術短期大学部入学者選抜学力試験

8日 評議会

〳 大学院審議会

16日 国際交流委員会

18日 発明審議委員会

〳 附属図書館商議会

18日 原子炉実験所學術講演会

19日 医療技術短期大学部卒業式・専攻科修了式

23日 修士学位授与式

〳 博士学位授与式

24日 卒業式

29日 安全委員会

〳 創立七十周年記念後援会助成金選考委員会

